

地域生活の定着から就労へ向けての一体的支援

札幌太田病院 地域福祉課

○林 美里¹⁾ 馬場 潤¹⁾ 北島 朝子²⁾ 細田 美保¹⁾ 太田 秀造³⁾ 太田 健介³⁾

1) 精神保健福祉士、2) 看護師、3) 医師

1. はじめに

精神障害者の地域生活を継続していくためには、医療と日常生活の支援の両方を提供していく必要がある。今回、母も統合失調症を患い、十分な生育環境を得ることができなかった女性の症例に対して、地域生活の定着から就労に向けて一体的な支援を行ない、ハローワークに結びついた経過について報告する。

2. 事例紹介

A氏、女性20代後半。統合失調症。小学校時に両親が離婚し、母と二人暮らしの生活。母からは虐待を受けて育った。自宅は乱雑で公共料金の滞納もあり、親子二人の生活は破綻していた。X年、A氏が母のB精神科受診に付き添い発症が判明。母、A氏ともにB精神科病院に入院。B精神科病院の医師より母と距離を置いた生活が必要と判断され、A氏のみ当院に転入院となった。母は自宅での生活が困難なことから、B精神科を退院後、グループホームに入居し就労継続支援A型に通所。A氏もグループホームを見学し、試験外泊を経てX+1年、グループホームへ退院しデイケアに通所となった。

3. 経過

グループホームでは生活支援を継続。デイケアでは、社会生活技能訓練(SST)、就労プログラムを実施。プログラム以外の時間は、他者との自発的な交流はほとんど見られず、寝ていることが多かったが、徐々に「声優になりたい」「自立したい」と話すようになった。就労継続支援B型や地域活動支援センターを見学し、X+3年、地域活動支援センターへの通所を開始。デイケアと併用しながら徐々に通所日数を増やし、週3回の通所を継続。デイケアと地域活動支援センターを利用する中で「声優になるために、専門学校へ通うお金を貯めたい」と、少しずつ具体的に考えることができるようになった。今後は「デイケアを卒業し、ハローワークを利用して働きたい」「一人暮らしをしたい」と目標を話され、ハローワークのフォローアップ研修に参加。症状の再燃なく、X+5年からは、本人の希望にて、ハローワークの連携による就労支援モデル事業を利用中である。

4. 考察

入院中から退院した現在まで継続的な関わりがあったことで、病院、グループホーム、地域活動支援センターのそれぞれで安心感が生まれた。そして、人との関わり方を学び、生活習慣を身につけることが出来るようになった。できることが増え、成功体験の積み重ねにより、自信が持てるようになった。また、現実検討能力が高まり、具体的な目標を言語化できるようになった。地域生活から就労への一体的な支援を行ったことで、連携がとりやすく、問題点のすり合わせと目標の共有を図ることができた。さらに、A氏の現状をそれぞれの視点で多面的に把握し、具体的に話し合ったことで、目標が明確になり、A氏が望むハローワークの就労支援モデル事業に移行できたと考える。今後も、生活支援や就労支援を継続しながら、A氏の意味を尊重した関わりを行なっていく予定である。

参考文献： 1) 蟻塚亮二(2007) 統合失調症との付き合い方—闘わないことのすすめ—